

# 最上川と私たち

シリーズ・その

世界の四大文明は、ナイル、チグリス・ユーフラテス、インダス、黄河という川の流域から起こっている。山形県の歴史も最上川とともにあり、人々は最上川を「母なる川」と呼ぶ。自然環境も暮らしも産業も文化も最上川を抜きに語れない山形県なのだが、県民は果たして最上川の何を継ぎ、何を未来に伝え、人と川とのような関係を構築しようとしているのだろうか。最上川をテーマに、山形県の未来を考え、在るべき県土をイメージしてみよう。この欄は、「県民の川・最上川」についてシリーズでリレー執筆する。多くの県民の方々と一緒に考えたい。

## 地形・景観



### “国際河川”の最上川

最上川は「一県一河川」に近い珍しい形状の河川であり、その影響は流域内で暮らす人々に等しく及ぶと考えられている。しかし、それは県域が現在の形になってからのことである。歴史的に見れば最上川は欧州のライン河のように異なる国家間を貫流する“国際河川”の時代が長く続いた。江戸時代の幕藩体制下の米沢（上杉）、山形（最上）、新庄（戸沢）、庄内（酒井）という異なる治世下を貫流した“国際河川”であり、最上川と地域との関係もそれぞれ違い、異なる文化風土を形成した。その名残は深く沈潜し、現代にあっても陰に陽に各地域に影響を及ぼしている。現在の山形県は最上川という一つの河川の流域内に属しているとはいえ、川と人との関係や川の地域社会への影響は均一でも同質でもなく多様である。

まず、地域の言語体系が異なる。方言の語尾が置賜の「ソ」、村山の「ズ」、最上の「ジュ」、庄内の「ノ」と違う。学校では標準語を使った教育が行われても、地域内では方言が生き続けている。言語体系が異なれば人々の思考方法や行動様式が違い、独自の住民性が形成され地域社会のパフォーマンスも異なる。第一次産業の発展経過も伝統工芸などとともに地域特性があり現代に伝わっている。置賜は青<sup>あお</sup>苧や養蚕や絹織、村山は紅花や果樹や煙草、最上は木材・山菜、庄内はコメ・漁業と、地形や気候の違いの影響を受けた産業構造が基礎に横たわっている。現代になって工場誘致によって工業化が進み第二次産業が発展、県外からの大規模店舗進出で小売業の均質化が進んだものの、産業クラスター、技術シーズ、コミュニティの質など産業のインフラの違いは依然残り、それぞれ地域産業の個性を形成している。

最上川は米沢市の西吾妻山を源流とするが、現在の最上川は県内の数カ所の峡谷を数百万年かけて水が削り形成されたものと考えられている。源流を發した水は五百川峡谷（白鷹町 大江町）の河床を削って置賜

盆地から村山盆地へ流出。そして、村山盆地から碁点峡谷（村山市）を削り大石田・尾花沢盆地へ流下。さらに、新庄盆地から最上峡谷（戸沢村 立川町）を削り庄内平野に流出した。最上川本川の水位は最上流の米沢市・信濃町観測所から最下流の酒田市・両羽橋観測所の間で234<sup>㍎</sup>の高低差しかない珍しい河川である。“国際河川”としての様相を帯びるようになった理由は、幕藩体制に起因するというよりも水の流れを阻み人の行き来を妨げる山、つまり地形によるところが大きいといえよう。

## イザベラ・バードが絶賛した明治の置賜

多くの人々に親しまれているレクリエーション施設「源流の森」は飯豊町の白川上流に設置されたが、置賜地方では最上川は「松川」と呼ばれ、「最上川」の呼称は長井市の松川と白川との合流点から下流を指した。明治11年に置賜地方を訪れたイギリスの女性旅行家イザベラ・バードは「日本奥地紀行」に置賜地方を「美しさ、勤勉、安楽さに満ちた魅惑的な地域である。山に囲まれ、明るく輝く松川に灌漑されている。どこを見渡しても豊かで美しい農村である」と観察し「アジアのアルカディア（桃源郷）」と書いている。世界中を徒歩で旅した女性だが、最高級の賛辞をこの置賜地方に贈っている。明治維新の混乱が続く世相が騒然としていたころの話であり、バードの目に置賜地方がそのように映ったこと自体が目目される。仮に今またバードが山形を訪れたら、再び「アルカディア」と感じてくれるかどうか。

置賜地方のランドマークである白竜湖（南陽市）は南方を除き三方を山に囲まれている流入河川のない湖であるが、太古の湖盆の名残と考えられている。江戸時代の文献には湖表面積は「八町八反」と記録されているが、堆積が進み昭和49年には湖表面積は6.9<sup>㍎</sup>に減少、その後も縮少が続いている。貴重な泥炭形成植物群落があり、昭和30年に県指定の天然記念物になった。かつて五百川渓谷を利用したヤナ漁が盛んだった白鷹町では荒砥地区に鮎茶屋が多くあったが、昭和58年に下川地区の最上川にヤナ場を復活させ重要な観光資源になっている。

## ごみに泣いている“母なる川”

村山地方の入り口となる朝日町には最上川本川唯一の上郷ダムがある。昭和37年に東北電力が設置した高さ23.5<sup>㍎</sup>、長さ166<sup>㍎</sup>、貯水量766万立方<sup>㍎</sup>の発電専用



上郷ダムのごみ

のダムで、最大出力15,400<sup>㍎</sup>ワットの能力がある。ところが、このダムはごみ処理という予想外の役割を仰せつかることになった。通常、一日当たり2～4立方<sup>㍎</sup>、4トトラック1台分のごみを処理している。これが増水時は一挙に25倍にも増える。このごみ処理のために取水口付近にスクリーンを設置し除塵機でかき上げ、ダム湖面のごみは集塵船でかき集めている。平成13年から15年までの3年間平均で年間65<sup>㍎</sup>を一般廃棄物として処理しており、その費用も少ない金額ではない。水量が多い時はダムゲートから放水するが、その際下流に流れるごみはカウントしていない数量だ。最上川を流れるごみ量の多さが分かり、“母なる川”の嘆きを押し量ることができる。ごみの種類は枯葉・小枝等が70%、ペットボトルなど生活廃棄物が15%、流木が10%、産業廃棄物が5%となっている。

峡谷を出た最上川は大江町で蛇行し滞りになる。かつては舟運の中継地の水郷として栄え、楯山城跡からは蛇行する最上川が一望できる。「ヨーイサノマカーショ」と歌われる最上川舟唄は渡辺国俊・後藤岩太郎の両氏によって制作され昭和11年にラジオ放送されて以来広く歌い継がれている。楯山城跡には最上川舟唄発祥の碑がある。支川の月布川には県の魚・サクラマスのか化場が設置された。今では秋の芋煮会は本県全域の風物詩になっているが、芋煮会発祥の地を物語る「鍋掛松」が中山町の最上川河畔の温泉施設「ゆ・ら・ら」敷地内にある。この芋煮の風習も最上川舟運に由来する。村山市内の「碁点」「三ヶ瀬」「隼」は舟運時代には三難所として恐れられた。しかし今や、三難所舟下りがあり、つり橋があり、クアハウス、農村文化保存伝承施設、体験農園、そば打ち体験施設などがある一大観光拠点に変わった。絵画の真下慶治も大淀などの最上川の風景を描いた作品を数多く残している。

河北町の紅花資料館は江戸時代の紅花商・堀米邸跡であり紅花の集散地だった舟運時代の栄華を伝える。エジプト原産でキク科のベニバナは葉のトゲが朝露で

柔らかなうちに摘み取る必要があり、この条件に合う気象の内陸地方が栽培に適した。染料として京へ運ばれたが、最盛期の寛政年間には「最上千駄」と呼ばれた。コメが4俵で1両の時代にベニバナ1駄は32貫(120<sup>キロ</sup>)で40~50両の値がついたという。大石田町は紅花などの荷駄の集散地として栄え、陸路集まる物資はここで舟に積み替え酒田港へ運んだ。大石田、尾花沢は寛永年間に幕府直轄領となり大石田に舟役所が設置された。平成8年にこの頃の舟着場をイメージした舟役所大門のある堀蔵に壁面を修景した特殊堤が完成した。江戸時代に「紅花大尽」と呼ばれた尾花沢の豪商・島田屋の三代目・鈴木清風は江戸で紅花販売に敏腕を振るう一方、句会を開くなど俳人として芭蕉らと広く交流した。元禄2年に清風を頼り訪れた芭蕉は尾花沢に10日間滞在し「まゆはきを俤にして紅粉の花」と詠んだ。

## ハイテクの「縄文ヴィーナス」



縄文のヴィーナス

平成4年夏、舟形町の小国川左岸の西ノ前遺跡から高さ45<sup>センチ</sup>、重さ2.8<sup>キログラム</sup>の日本最大の土偶が出土した。4,000年以上前の縄文時代にこの地で人々が生活していた証である。土偶はその均整のとれた美しさから「縄文のヴィーナス」と呼ばれている。縄文の人々の美しさを造形する感性と技術の高さには現代人は驚嘆せざるを得ない。平成10年に国指定重要文化財に

なった。庄内平野から日本海に注ぐ最上川の支川の小国川を逆に最上町塚田までさかのぼると分水嶺が出現する。川の流が足下で左右に分かれ、片方は鳴子町から古川市を経て大崎平野から太平洋へ注ぐ江合川となる。新庄盆地から庄内平野へ至る最上峡は長く陸路が発達せず、江戸時代まで主要交通手段は最上川の水路だった。新庄 余目間55.2<sup>キロ</sup>の鉄路・陸羽西線が登場するのは大正3年である。陸路は現在の国道47号が昭和28年に2級国道に指定され、1級国道47号に格上げされるのは昭和37年で、この一次改修工事が完成したのは昭和47年である。鉄路、陸路の発達に反比例して水路による物資輸送は衰退したが、逆に旅情を楽し

む観光機能のニーズが高まり「最上川舟下り」は今や山形県のメイン観光になった。江戸時代に戸沢藩が舟荷の出入りを監視した船番所がある戸沢村の古口から草薙までの12<sup>キロ</sup>を白糸の滝などを眺めながらウォータージェット船で約1時間かけ下る。

## 視点場と視対象と視領域

現在は独立水系になっている庄内平野の赤川もかつては最上川と一体になっていた。河口周辺の洪水を防ぐため昭和28年に分流工事が行われ、最上川から切り離され独立河川となった。松山町と平田町にまたがる丘陵「眺海の森」は哲学者の阿部次郎が好んだ場所といわれる。晴れた日に山頂の展望台に立てば、その意味が一目瞭然に理解できる。北を向けば鳥海山の偉容に圧倒され自然の雄大さに気づき、南を向けば手前のキラキラ光る最上川とその向こうに広がる水田模様が心をなごませ、西を向けば日本海がはるか遠い世界へ思いを誘い、東を向けば幾重にも連なる山並みが真理の奥深さを感じさせる。まさに思索したくなる場所であり、「三太郎の日記」の原点がここにあると思ってしまう。

「眺海の森」は山と川と海と平野とを1カ所で、しかも視界360度で眺望できる世界でも珍しい貴重な視点場といえよう。そして、見る視対象も超一級品の美しさである。心は感動でいっぱいになり、山形の素晴らしさを誇りたくなり、いつまでも留まっていたいという気持ちにさせる。ところが、視点場と視対象との間にある視領域は必ずしも良好ではない。近年になり駐車場に白線がひかれ、これが否応なく視界に入り感動の世界から現実の世界に引き戻される。日本列島はおしなべて、遠くから眺める遠景は美しいが、人手がかかっている中景、近景と視対象との距離が縮まるほど醜さが多くなる。

最上川河口は冬「スワンパーク」になる。昭和40年代の始めから河口を訪れるオオハクチョー、コハクチョーは増え続け1万羽を超えている。河口の酒田港は江戸時代の西廻り航路時代から5万<sup>ト</sup>岸壁を持つ北港を加え中国・国龍江省へ通じる国際航路に变身した。北前船時代に船頭たちが愛用した精巧な船筆筒は今でも価値ある技術と言えよう。河口そばの山居倉庫は藩政時代にコメの積み出し港としてにぎわった酒田港の名残で、明治26年に米穀取引所付属倉庫として建設された。土蔵造りの12棟の屋根は二重構造になっており、西側のケヤキの大木は倉庫内の温度上昇を防ぐ日よけの役目を担っている。コメの検査機材や農機具が展示



ケヤキ並木と一体化した山居倉庫

してあり貴重な資料館になっている。さらに、倉庫を利用して新設された観光物産館「酒田夢の倶楽」は地元の商品、飲食施設、海鮮市場、オープンテラスなどを配し平成14年にオープン、観光客が急増中で、平成16年12月に国内586点の応募の中から最高の「ディスプレイ産業大賞」に輝いた。

## 自然生態系、アメニティが景観の基本

以上是最上川が貫流する4地区のプロフィールのごく一部である。最上川は山形県の地形、自然、歴史、文化、産業、生活などを語り、それらは山形県の景観形成要素そのものであることが分かる。そして、このような事象は本県に生きた人々の地域づくりの集大成でもある。景観形成の憲法とも言える「景観緑三法」が平成16年12月に施行され、国家として景観形成に取り組むことになった。既に全国各地で景観形成の実践が行われており、むしろ醜さの蓄積が増した中での立法で、格段の財源の裏付けもない法律であり、遅すぎた立法である。景観は意識して形成しなければ、地域は美しくならず、活力も生まれず、快適にもならず、誇りを持てるようにもならない。「ロマンティック街道」など日本から美しい景観に惹かれ多くの人々が訪れるドイツでは、景観形成に関する規範も基準もルールも技法も体制も資金も格段に充実している。河川行政に限定しても1986年に「連邦水収支法」が制定され、各州の個別法と併存する形でさまざまなアプ

ローチの仕方で改善が試みられ、1994年には連邦基本法第20a条で「自然的生存基盤の保護義務」が盛り込まれるなど、絶えず法体系自体が進化している。一方、わが国では昭和51年、OECD(経済協力開発機構)から「日本は経済成長では勝利したがアメニティ(amenity)では勝利していない」と指摘され、突然「アメニティとは何ぞや」と大騒ぎになった。以来、経済的豊かさを求めるだけでなく、アメニティや文化景観や生態系を考える地域づくりを取り入れつつある。それに、円高が海外旅行ブームを招き、海外諸国の美しい景観に触れる機会が増え景観に対する眼の肥えた人が増え、国内の景観に批判の目が注がれるようになった。景観は地域の個性とほぼ同義語であるだけに、今後の本県の景観形成の取り組みの進化に期待したい。

## 国に先行する本県の景観形成の取り組み

景観形成対策で市民憲章に「美しい街並み」を挙げている県内市町村が少なくない。だが、ほとんどは絵に描いた餅に終わっている。実現のプロセスがないところが多い。県では「べにはなの丘構想」(平成4年)が道路沿線の市町間で景観協定を結び、「気候風土に育まれた山形の住まい」(同年)が住居様式を考案、「未来に伝える美しい山形づくり推進プラン」(平成7年)がアメニティに配慮した地域づくりを、「県土景観ガイドプラン」(平成7年)が4地方の景観特性を認識、「環境基本計画」(平成8年)が環境の保全と創造、「屋外広告物条例」(平成11年)が看板規制、「アルカディア街道復興計画構想」(平成13年)が住民参加と資源を生かした景観形成の施策だった。市町村でも「家並み保存条例」(昭和61年、尾花沢市銀山)、「不拔の森条例」(平成元年、長井市)、「美化推進及び美観の保護に関する条例(ポイ捨て禁止条例)」(平成5年、最上町等)、「街並み景観形成条例」(金山、米沢、高畠等13市町)の先進的取り組みがあり、山形市の市街地では電線地中化が進んでいる。高畠町のまほろば通り商店街は県内初の店舗建築様式、電線地中化、店舗看板様式統一など複合的な取り組みとして注目される。山形県は自然環境は恵まれているのだから、ごみ、屋外広告など人為的な劣悪要素を排除することだけでも景観は大きく改善されるはずだ。それと、自然の生態系にのっとり景観を形成すること、地域文化の個性を磨く実践を行うことが、持続的でアメニティ豊かな県土づくりに寄与するはずである。次世代に生きる人々に感謝される景観形成を行うことが現在本県に生存している人々の責務である。( 荘銀総合研究所理事長 石川敬義 )